１８	豊田	梅坪台中学校	クリタ　ユイ 氏名　栗　田　勇　猪

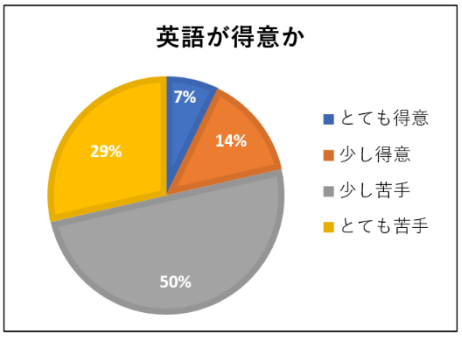
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

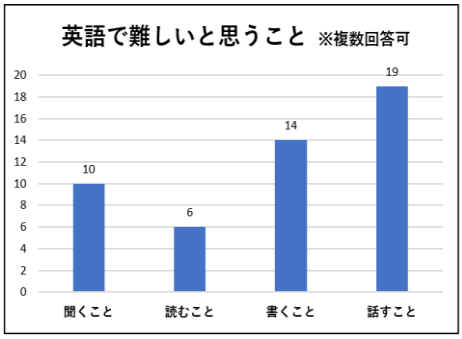
自分の英語に自信をもち、テーマについて分かりやすく説明し、伝え合う生徒の育成
― ３年　タブレット学習とプレゼンテーション活動を通して ―

１　主題設定の理由

新学習指導要領において、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」のうち、「話すこと」がさらに「やり取り」と「発表」に分かれ、会話だけでなく、英語で発表する能力も求められるようになった。分かりやすい発表や即興的なやり取りのためには、基礎基本の定着に加え、相手意識をもって「書くこと」や「話すこと」が特に大切になると考える。

本学級の生徒は、男子 16 名、女子 12 名で構成されている。教科書本文や単語については、１年生の頃から大きな声で繰り返し音読をすることを重視しており、多くの生徒が前向きに教科書の音読や口頭練習に取り組むことができている。しかし、英語が「少し苦手」または「とても苦手」と答えた生徒は合わせて 79%に上った**（資料１）**。「英語で難しいと思うこと」については、「書くこと」「話すこと」と答えた生徒が多かった。授業では、ＡＬＴに対して英語で質問をしたり、フリートークをしたりする機会を設けることもある。しかし、伝えたいことがあっても「英文が作れない」「会話に自信がない」と、活動に消極的になってしまう生徒が多い。スモールトークにおいては、習った単語を並べて何とか会話を繋げようとする姿が見られるが、英語特有の語順や文法事項が身に付いていないため、あやふやなやりとりをする面が目立つ。





資料１　英語授業アンケート

そこで、本研究では①タブレット学習（Qubena）を導入し、個のレベルに応じて反復練習を重ね、英語特有の文法を理解して基礎基本の定着をはかることと、②英語によるプレゼンテーション活動を重ね、クラスメイトとの協働学習およびＡＬＴとの交流を通して、英語を使って表現することに自信をもたせること、を研究主題として設定した。

２　めざす生徒像

生徒の現状をふまえ、めざす生徒像を次のように設定した。

①タブレットを幅広く活用し、主体的に英語表現を学び、教え合う生徒
②自分の英語に自信をもち、テーマについて分かりやすく説明し、伝え合う生徒

３　仮説と手立て

＜仮説１＞タブレットを幅広く活用し、必要に応じてペアやグループによる協働学習を充実させれば、基礎基本の定着につながり、英語で表現することに自信がもてるだろう。

【手立て①】スタディペアによる協働学習

成績上位の生徒と下位の生徒で意図的にスタディペアを組み、教科書の音読練習やワークの練習問題に協働的に取り組んだり、互いに教え合ったりする機会を増やす。

【手立て②】帯学習での弾丸インプット練習

毎回の帯学習として、新出文法を用いた英文を記載した音読練習シートを配付し、個人で速読したり、ペアで英訳練習をし合ったりする「弾丸インプット」を実践する。

【手立て③】タブレットの幅広い活用

文法の導入や演習の場面において、タブレット学習（Qubena）やデジタル教科書を活用したり、音読やプレゼンテーションの練習において、録画機能を活用したりする。

＜仮説２＞生徒が興味をもつ場面設定を行い、選んだテーマについてプレゼンテーションする活動を繰り返し行えば、楽しく表現力や会話力を身に付けることができるだろう。

【手立て④】生徒が興味をもつプレゼンテーションの場面設定

教科書の内容に関連させつつ、身近なテーマに置き換えて教師がモデルプレゼンテーションを行うことで、生徒に発表内容をイメージしやすくさせ、発表意欲を高める。

【手立て⑤】表現力の向上を目指すための段階的な発表会の設定

英語の表現力や会話力を段階的に向上させるために、複数回の発表の場を設定し、発表の形態を工夫する。第１回発表会は学級でのグループ内発表、第 2 回発表会はグループでＡＬＴへ発表、第 3 回発表会はグループ内の人数を減らしてＡＬＴへの発表・および意見交換を計画した。

４　抽出生徒について

生徒の実態	教師の願い
アンケートでは、英語は「少し苦手」、英語で難しいことは「話すこと」と「書くこと」と回答。学習に対してひたむきに努力できるが、語順や英文の書き換えが苦手であり、自分の英語に自信をもつことができていない。	タブレット学習やペア学習を通して英文法を理解させ、英語への苦手意識を軽減させたい。級友やＡＬＴとの英語交流を通して達成感を味わわせ、失敗を恐れず、伝えたいことを自信をもって英語で発表できるようにしたい。

５　実践と考察

（１）手立て①「スタディペアによる協働学習」について

教科書の音読や問題演習に協働的に取り組んだり、互いに教え合ったりする機会を増やすため、人間関係も考慮に入れた上で、成績上位の生徒と下位の生徒で意図的にスタディペアを組んだ。最初は、ペアで教え合うといっても、上位の生徒が下位の生徒に一方的に答えを教えるだけになっていることが多かった。しかし、ペアで問題演習に取り組む時間が増えるにつれて、上位の生徒はペアの子の苦手なポイントを把握して解説をしようとすることが増えた。また、下位の生徒は上位の生徒に積極的に質問をして、文法や語順について理解を深めようとする生徒が増えていった。

抽出Ａは成績上位のペアに対して、動名詞の主語と三単現「s」の関係について質問をし、疑問を解決していた。一方的に教わるだけでなく、自分の疑問点を相手に伝えながら助言をもらい、主語が単数になる場合と複数になる場合について理解することができていた。スタディペアによる教え合いは気軽に質問もしやすく、教える側生徒にとっても知識を定着させるために効果的であった。

抽出Ａ：「Listening to her songs」の後のmakeは「s」がつくのかな？
　ペア：教科書の「Playing sports makes me happy.」みたいにつくと思うよ。
抽出Ａ：sportsって複数形なのに、何で動詞に三単現の「s」がつくの？
　ペア：主語が「～すること」っていう使い方だと単数扱いになるんだよ。
抽出Ａ：そうなんだ。じゃあ「Listening to her songs」も単数扱いだね。
　ペア：主語に動名詞が入っているかどうかがポイントだよ。
抽出Ａ：主語が「sports」だと複数だけど、「playing sports」だと単数ってことか。

（２）手立て②「帯学習での弾丸インプット練習」ついて

No	English	日本語
1	I have seen wheelchair tennis once.	私は一度車いすテニスを見たことがあります。
2	I have never played wheelchair tennis.	私は一度も車いすテニスをしたことがありません。
3	He has cooked takoyaki many times.	彼は何度もタコヤキを作ったことがあります。
4	Have you ever seen Paralympic Games?	あなたはパラリンピックの試合を今までに見たことがありますか。
5	I have never eaten curry and rice.	私は一度もカレーライスを食べたことがありません。
6	Have you been to a Paralympic event?	あなたはパラリンピックのイベントに行ったことがありますか。
7	I'm a big fan of Otani Shohei.	私は大谷翔平の大ファンです。
8	Playing sports makes me happy.	スポーツをすることは私を幸せにします。
9	He has won many world championships.	彼は世界選手権を何度も優勝したことがあります。
10	Smiles keep me positive.	笑顔は私を前向きに保ちます。
11	Athletes show us that anything is possible.	運動選手はすべてが可能であると私たちに示します。
12	He was not satisfied with ordinary types.	彼は普通のタイプでは満足できませんでした。
13	Mr. Kurita showed us that English is interesting.	栗田先生は英語が面白いことを私たちに示しました。
14	I am a big fan of yours.	私はあなたの大ファンです。
15	Your performance was really awesome.	あなたのパフォーマンスは本当にすばらしかったです。
16	Please write me back if you have time.	もし時間があれば私に返事を書いて下さい。

	Rapidly（読んだ数）	Naturally（発音の良さ）	Translation（日→英）
1回目	個	A・B・C	個
2回目	個	A・B・C	個
3回目	個	A・B・C	個
4回目	個	A・B・C	個
5回目	個	A・B・C	個
6回目	個	A・B・C	個
7回目	個	A・B・C	個
8回目	個	A・B・C	個
9回目	個	A・B・C	個
10回目	個	A・B・C	個
11回目	個	A・B・C	個
12回目	個	A・B・C	個

資料２　弾丸インプット

	Rapidly（読んだ数）	Naturally（発音の良さ）	Translation（日→英）
1回目	10 個	A・(B)・C	3 個
2回目	12 個	A・(B)・C	4 個
3回目	13 個	A・(B)・C	5 個
4回目	16 個	A・(B)・C	5 個
5回目	16 個	A・(B)・C	6 個
6回目	19 個	(A)・B・C	8 個
7回目	21 個	(A)・B・C	7 個
8回目	21 個	(A)・B・C	8 個
9回目	23 個	(A)・B・C	9 個
10回目	23 個	(A)・B・C	11 個
11回目	25 個	(A)・B・C	10 個
12回目	26 個	(A)・B・C	11 個

資料３　抽出Ａの記録

文法の定着を図り、プレゼンテーションにも活用できるようにするため、授業の帯学習として「弾丸インプット」を用いて、反復口頭練習に取り組んだ**（資料２）**。最初の回は教師が範読をし、生徒がそれをリピートするが、次回からは教師の範読は行わずに生徒個人による速読とペア練習を行う。ペア練習では、一方の生徒が言う日本語を聞き、ペアの生徒はシートを見ずに英語に直す。その後、役割を交代して行う。それぞれの活動は、１分間ずつ行い、記録を残していく。記録を残していくことで、生徒が成長を実感でき、次回の目標も設定しやすくなるため、生徒たちは意欲的に取り組むことができた。単元を通して継続することで、多くの生徒が速読と英訳の力を向上させることができた。

抽出Ａは、最初は制限時間の１分で速読は１０文、英訳は３文しかできていなかったが、単元の最後では、１０文以上を英訳できるようになっていた。速読のスピードがついてくると、正しい発音で読む意識も強くなっていった**（資料３）**。また、反復練習をする中で現在完了形の表現を使いこなせるようになり、プレゼンテーションでも積極的に取り入れて話すなど、学習の成果を生かしていた。

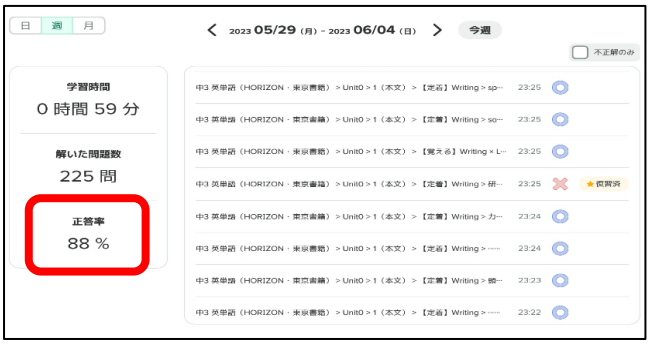
（３）手立て③「タブレットの幅広い活用」ついて

教科書の読み取りでは、デジタル教科書を活用しながら単語や本文の音読練習に取り組んだ。タブレットの音声に合わせてリピートしたり、シャドウイングしたりすることで、英語の発音やリズムを確認した。また、英語の発音を上達させるため、タブレットの録画機能を活用した。教科書の音読や発表練習の際にペアやグループで録画し合い、正しい発音ができているか、聞き手を意識した発表ができているか等の確認を行うことで、表現力を高めることができた。

さらに、個のレベルに応じて学習を積み重ね、着実に英語表現を習得するための手立てとして、学習アプリ「Qubena」を活用した。単元ごとに対応するQubenaの問題を精選してワークブックを作成し、文法導入や問題演習の場面で取り組んだ。基本問題を集めたワークブックと、標準問題を集めたワークブックを両方配信することで、生徒がレベルに応じて問題を選択できるようにした。Qubenaの

機能により、間違えた問題を復習パートで解き直すことができたり、級友と時間を競いながら学習したりすることができるため、一人ひとりに「個別最適化された学び」の機会を与えることができた。

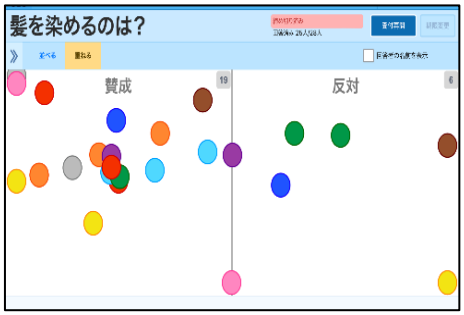
抽出Ａは、英語がやや苦手な生徒であったが、継続的に Qubena に取り組む中で、解説機能やヒント機能を活用し、英語特有の文法や表現を理解していく様子が見られた。配付されているワークブックを一通り終えた後は、自分で苦手な問題を選択して自主学習に取り組むなど学習意欲を高め、意欲的に苦手克服にも取り組む様子が見られた。最初は、正答率も 7 割程度であったが、回数を重ねるごとに９割近くの正答率に達することができるようになった。**（資料４）**



資料４　抽出Ａの学習記録

（４）手立て④「生徒が興味をもつプレゼンテーションの場面設定」ついて

プレゼンテーションの場面設定については、教科書の Let's Write の単元に関連させつつ、教師が発表モデルを見せることで、発表のイメージを掴ませ、意欲が高まるようにした。「好きな人物にファンレターを書く」という題材に関連させて、「推しへの熱い思いを発表しよう！」という学習課題を設定したり、「記事への意見文を書く」という題材に関連させて、「関心のあるテーマについてＡＬＴと意見交換しよう！」という学習課題を設定したりした。



資料５　ポジショニングの活用

発表テーマを考えるにあたっては、生徒が日頃関心をもっている話題を議題として挙げさせ、それらの議題についてタブレットのポジショニング機能を使うことで、一人ひとりの生徒の立場を明示させた**（資料５）**。そこで出た結果をもとに、同じ意見をもつ生徒を集めてグループを編成し、グループ発表の形式で行った。同じ意見をもつ生徒たちが集まることで考えを深めたり、英語表現の確認をし合ったりして、発表内容をより充実させることができた。

（５）手立て⑤「表現力の向上を目指すための段階的な発表会の設定」ついて

第１回発表会は、学級でグループ内発表の形式とし、発表の感覚を掴むことを目標にした。発表用のスライドは、伝えたいことを示す写真と英語のキーワードのみを入れた簡易なものとし、キーワードを見ながら英文で伝えられるように指導した。発表では、聞き手に伝わりやすい声やアイコンタクトを重視し、相手意識をもった発表となるように心がけた。スタディペアの取組を生かし、発表練習では互いに発表原稿を添削し合ったり、正しい発音について確認し合ったりすることで、協働的に発表の質を高めようとする姿が見られた。抽出Ａは、好きなアイドルについて紹介文を考え、彼が歌っている写真や、飼っているペットの写真をスライドに載せて魅力を伝えるなど、聞き手が興味をもつような発表にしようとしていた。弾丸インプットの現在完了形の文を使い、「I have been to his concert twice!」という文を入れるなど、習得した文法を使いこなす様子も見られた。

第２回発表会は、より実践的な英語力を身に付けるため、実際の外国人相手に英語でやりとりすることを目指した。当日はＡＬＴを４名招き、ローテーションによって全グループが全ＡＬＴに発表できる機会を設けた。発表後にＡＬＴからの質問タイムを設け、英語でやりとりをする中で、即興的な会話力の育成につなげた。さらに、ＡＬＴから発表に対してのアドバイスや、表現の指導を受ける時間を設けることで、発表を重ねるごとにプレゼンテーション力や英語の表現力が高まった。抽出Ａのグループは、「本を読むなら紙の書籍より電子書籍！」というテーマで意見文を考えていた。テーマについてＡＬＴと会話する中で、ＡＬＴが「紙の本のにおいが好き」という意見や、「古本を安く買える」などの意見を聞き、抽出Ａは「Now I like paper books, too!」という意見をＡＬＴに言うなど、思考を働かせながら精一杯コミュニケーションを取る様子が見られた。

第３回発表会は、より主体的に発表を考えられるように、グループの人数を減らした。また、「自国の魅力をＡＬＴと紹介し合おう！」というテーマにし、ＡＬＴにも発表をしてもらい、お互いの国について意見交流する時間を設けた。生徒が相手に伝えるだけでなく、ＡＬＴの発表を聞いて質問するというタスクを取り入れることで、リスニング力や即興的な会話力の育成につなげた。抽出Ａは、トリニダード・トバゴ出身のＡＬＴから「サメの肉を使ったハンバーガーがある」という情報を聞き、「How much is it?」「Is it delicious?」と質問するなど、相手の英語を聞き取った上で質問したり、会話を繋げたりしようとする姿が見られた。

第１回発表会の様子

第２回発表会の様子

第３回発表会の様子

６　研究の成果と課題

（１）仮説１について

手立て①では、固定のスタディペアを活用したことで、ペア同士の信頼感を高めることができ、協力して会話練習や問題練習に取り組む姿が見られた。上位の生徒は、進んでアドバイスをする役割を担うことで、自分の英語力に自信をつけていた。あまり成績に差がないペアも、協力することで、一人では気付けなかった間違いに気付いたり、互いに向上していこうという姿勢が見られたりと、ペア学習の効果が発揮された。手立て②では、弾丸インプット練習によって多くの生徒が発表に使える表現を効果的に身に付けることができた。音読スピード上がっただけでなく、正しい発音を意識しようとする生徒も増えた。毎回記録を残すことで、自己新記録を目指したり、ライバルに勝とうとしたりする生徒など、英語学習に対する意欲の向上が見られた。手立て③では、タブレット学習を充実させることで、英語が苦手な生徒もゲーム感覚で学習に取り組むことができた。また、つまずきやすい文法事項も、復習パートで繰り返し練習することで定着を図ることができた。

抽出Ａは、元々人前で英語を話すことが得意でなかった生徒だが、弾丸インプットによる反復練習や、ペアでの教え合いを繰り返していく中で自信をつけ、英語で伝え合うことに対して少しずつ意欲的になっていった。また、継続的に Qubena に取り組む中で、解説機能やヒント機能を活用し、英語特有の文法や表現を理解していく様子が見られた。これらのことから、仮説１に対する手立ては概ね有効であったといえる。

（２）仮説２について

手立て④では、生徒が関心のある発表場面を設定することで、生徒の伝えたい思いを喚起し、活発な言語活動につなげることができた。教師がモデル発表を見せることで、生徒に発表のイメージをもたせることができたが、モデル発表と似たような発表の生徒も多かったため、オリジナリティを評価項目に加えるとよかった。手立て⑤では、クラス内発表からＡＬＴへの発表、より少人数グループでの発表と、発表の難易度を上げることで、英語の必要感を高めながら生徒の主体的な態度を引き出し、実践的な英語力を培うことができた。また「発表⇒作戦タイム⇒発表」の流れを繰り返すことで、さらに質の高い発表につなげることができた。ＡＬＴとの会話では、正確な発音や正しい文法の必要性から、発表練習にも気持ちが入る生徒が多かった。実際にＡＬＴに英語が通じた経験をしたことで、自分の英語に自信をもち、ＡＬＴとさらにコミュニケーションを取りたいと思う生徒も増えた。

抽出Ａは、始めはＡＬＴとの会話では緊張し、言いたいことが上手く出てこない様子であった。しかし、グループで協力して日本語訳を確認し合ったり、意見を求められた際に自分の考えを述べたりするなど、習得した英語を駆使してコミュニケーションを取ろうとする積極性が見られた。第１回発表会の振り返りでは、あまり満足のいく発表ができず、自らの課題点を記述していた。しかし、第２回、第３回と発表会を重ねる中で課題を克服し、自己評価も上がっていった。発表練習の成果が出せたことや、教え合いで新しい表現が身に付いたこと、ＡＬＴとの交流によって新たな発見ができた喜びを記述していた**（資料６）**。よって、仮説２に対する手立ては概ね有効であったといえる。

第１回発表会

チェックリスト	できた			できてない
Big Voice（声の大きさ）	④	3	2	1
Eye contact（アイコンタクト）	4	3	②	1
Speed（速さ）	4	③	2	1
Pronunciation（発音）	4	③	2	1
Passion（情熱）	④	3	2	1

【発表を終えた感想・反省・次に生かしたいこと　など】
最初の発表では、実際にみんなの前で話すとつっかえたりして長くなって１分間におさまりませんでした。だから１ページを減らしたらちょうど良かったです。反省としては、アイコンタクトがあまりできなかった点です。パワポを見ることに集中してしまい相手の目をみることができていなかったので次回からはそれに注意したいです。

第２回発表会

チェックリスト	できた			できてない
Big Voice（声の大きさ）	4	③	2	1
Eye contact（アイコンタクト）	④	3	2	1
Pronunciation（発音）	4	③	2	1
Teamwork（チームワーク）	④	3	2	1
Talking with ALTs（ALT との会話）	④	3	2	1

【ALT の先生との会話から学んだこと】
ALTの先生は、話すときに手を使ったり First, Second とわかりやすい表現をしていました。また、緊張しない・恐れない方が大きな声で話せてアイコンタクトができるよ。と教えてくれたのでこれから意識したいです。

【発表を終えた感想・反省・次に生かしたいこと　など】
ALTの先生もたくさん笑顔でいることができて楽しかったです。思っていたより、まちがえたら先生の質問にも答えられて、よかったです。

第３回発表会

チェックリスト	できた			できてない
Big Voice（声の大きさ）	④	3	2	1
Eye contact（アイコンタクト）	④	3	2	1
Delivery（話し方）	④	3	2	1
Teamwork（チームワーク）	④	3	2	1
Talking with ALTs（ALT との会話）	④	3	2	1

【ALT の先生との会話から学んだこと】
バナナがつりせんで10円で買えるを聞いてすごくおどろきました。またテリヤキのような料理を見せてもらってすごくおいしそうでした。もう１人の先生はトバゴ出身で、サメの肉を使ったハンバーガーがあると教えてもらいました。どんな味なのかすごくきになります。

【発表を終えた感想・反省・次に生かしたいこと　など】
初めはALTの先生に発表するなんて、自分の英語が伝わるかハラハラだったけど、優しくリアクションをとってくれたおかげで、落ちついて発表することができました。また新たに習った表現などたくさんこれから使いたいです。

資料６　抽出Ａの振り返り

（３）課題と反省

「自分の推し」ついての発表を考える際、発表時間を１分と指定したが、「１分じゃ熱い思いを伝えきれません！」という生徒からの指摘があった。発表時間をもっと熟考するべきだったと思うとともに、生徒が意欲的に発表に取り組む姿勢を嬉しく感じた。生徒が「やってみたい」と思える「必要感」のある単元目標を設定し、主体的な態度を引き出すことが大切だと実感した。

本研究を通じて、英語で表現することに自信をつけ、英語で伝え合う楽しさを感じることができる生徒が増えた。しかし、正確な英語や、即興的な英語で会話するには、まだまだ練習が必要だと感じた。ＡＬＴとの会話では、自身が伝えたいことは伝えられるが、ＡＬＴの英語が聞き取れない生徒や、上手く英文で返答することができず、単語やジェスチャーだけで返答してしまう生徒も多かった。スモールトークでも、単語だけで返答する生徒が多く、その点の指導ができていないことを思い知らされた。「英文で話す」ということを普段から意識させていきたい。それが積み重なることで、互いに英文を聞き取る力にもつながっていくと考える。正確な英語についても、生徒同士での教え合いだけでは限界があるので、Qubenaや弾丸インプット等を活用しつつ、教師が生徒の思考や能力を把握した上で、必要な指導を考えていかなければならないと感じた。